

Matthias Baltes: *Die Weltentstehung des platonischen
Timaios nach den antiken Interpreten*, Teil I

Philosophia Antiqua, Volume XXX
Leiden, E. J. Brill, 1976, xiv+247S.

矢 内 光 一

プラトン（以下 Pl. と略記）の *Timaeus*（以下 *Tim.*）の叙述によると、世界はデミウルゴスによって創造され生成した（vgl. γέγονεν, 28B7）とされるが、その叙述を字義通りに取るか否かをめぐり古来解釈が大きく二つに別れてきた。すなわち、*Tim.* の叙述を字義通りに取り、世界がかつて現実に生成したとするところに Pl. 説があるとする解釈と、Pl. 説は字義通りのところにはなく、かつて現実に世界の生成があったと Pl. は考えていないとする解釈がそれである。前者は時間的解釈、後者は非時間的解釈と一般に称される。Pl. の直弟子たちの間にこの問題に関する意見の対立があり、アリストテレス（以下 Ar.）が字義通りに取り、そして Ar. の自説が世界の不生不滅ないし無始無終性にあることから Pl. を批判したのに対して、スベウシッポス、クセノクラテス（以下それぞれ Sp., Xe.）が Pl. の説は字義通りのところはないとして Pl. を擁護し、Ar. に反論をなした。以後概ね、ペリパトス派が時間的解釈、アカデメイア派が非時間的解釈を唱え、*Tim.* の世界生成の解釈に関する激しい論争が繰り広げられた。この解釈上の問題は、それ自体としては、Pl. における世界のいわゆる永遠性の問題に関わるものであるが、しかし内容上必然的に、Pl. の時間論、物質論、創造神デミウルゴスをいかに解するかといった諸問題とも関連し、また特に *Tim.* で述べられる靈魂の生成と *Phaedrus* (245CD) の靈魂の不生不滅説との不整合をいかに説明するかという重大な問題ともからんでおり、*Tim.* 解釈の中心問題となってきた。現代でもこの問題は、例えば A. E. Taylor (*A Commentary on Pl.'s Tim.*, Oxford, 1928), F.M. Cornford (*Pl.'s Cosmology*, London, 1937) らが非時間的解釈を取るのに対して、G. Vlastos ('The Disorderly Motion in the *Tim.*' (orig. *CQ*, 1939), 'Creation in the *Tim.*: Is it a Fiction?', *Studies in Pl.'s*

Metaphysics, ed. by R.E. Allen, London, 1965) が時間的解釈を唱え、さらに L. Tarán ('The Creation Myth in Pl.'s *Tim.*', *Essays in Ancient Greek Philosophy*, ed. by J.P. Anton et al., Albany (N. Y.), 1971) が Vlastos を批判するというように *Tim.* 解釈上の最も基本的な論争点となっている。

Baltes の研究はこの侃侃諤諤の論議をひきおこした *Tim.* の世界生成の問題に関する古代解釈史をはじめ本格的に究明したものである。もちろんこれまでも古代の諸解釈はある程度知られていたが、しかし諸解釈相互の関係、また歴史的展開に関するまとまった研究はまったくなかったと言っても過言でない。本書を見る限り、著者は、時間的解釈、非時間的解釈のいずれにも直接与することなく、解釈史・論争史の展開の実態の内在的解明に意を注いでいる。本書は表題に見えるように第1部であり、プロクロス（以下 Pr.）より前が対象とされており、Pr. および全体の結論は第2部にまわされる。著者は Pr. より後の諸解釈は Pr. を内容的に超えるものでないという理由からそれを省き、またカルキディウスを除いてキリスト教作家の証言も Schulplatoniker の解釈に言及していない限り取り上げておらず、研究全体の対象を Pr. にいたるまでの異教古代に限定している。本書ではそのうちシュリアノス、ヒエロクレスにいたるまでが論じられるが、その取り扱いには現存関係資料を網羅しておりきわめて実証的である。著者には本書（第1部が Habilitationsschrift, 1974, Münster）以外にもティマイオス・クロソスの注釈書 (*Timaios Lokros, Über die Natur des Kosmos und der Seele*, Philosophia Antiqua, Vol. XXI, 1972 (Dissertation, 1968, Mainz)) があり、同書からも著者がかねてから *Tim.* の古代解釈史の実証的研究を手がけていたことがうかがわれるが、著者は本研究についてさらにプロティノスまでの古代における、世界生成の問題に限らない包括的な *Tim.* 解釈史研究の近刊を予告しており、本研究がそれへの予備的ないし相補的な研究であることを謳っている。著者の関心は *Tim.* 解釈史という具体的視軸を通しての新 Pl. 派にいたるまでのプラトニズムの展開の解明にあるように推察されるが、本研究はそのさいの中核的位置を占めるであろうと言ってさしつかえあるまい。

本論は4章からなり、第1章で Ar., Sp., Xe. という Pl. の直接の弟子たちの古アカデメイア期が論じられ (Xe. の弟子クラントル(以下 Cr.) は第3章にまわされる)、第2章で以後の時間的解釈、第3章で非時間的解釈がいずれも時代順に取り上げら

れ、第4章が3章までの概観にあてられる。さらに第5章付録として Philoponus, *De act. m.*, VI, 27, S. 217,—17 221, 22R. におけるアプロディシアスのアレクサンドロス(以下 Al.)による Ar., *De caelo*, 279B32—280A10 の注解, および Pr., *In Tim.*, I, 391, 4—396, 26D. における *Tim.* 30A に対するポルピュリオス(以下 Po.) による解釈, というそれぞれ代表的な時間的, 非時間的解釈者の議論の独訳が付されている。取り上げられる作家, 証言は, 時間的解釈のほうでは, Ar., テオプラストス(ただし従来から指摘されているようにテオプラストスはこの問題について確信をもっていない), エウデモス, ソロイのテオドロス, エピクロス, (Cicero, *N.D.*, I, 18ff. (fr. 367, Usener) における) エピクロス派, キケロ, (Aetius, I, 7, 7 における) エピクロス派, アレクサンドリアのピロン, カイロネイアのプルタルコス(以下 Plu.), アッティコス(以下 At.), ハルボクラティオン, ガレノス, Hippolytus, *Philos.*, I, 19, 4f., [Galenus], *Hist. Philos.*, 17, ヌメニオス, (Diogenes Laertius, III, 71f. における) 無名の Pl. 派, Al., 非時間的解釈のほうでは, Sp., Xe., Cr., アレクサンドリアのエウドロス, ティマイオス・ロクロス, (Philo における) anonymi, Plu. の師アンモニオス, Aetius, II, 4, 1, アルビノス, アプレイウス, セエロス(ただし *Politicus* 神話を引き, またストア派の世界周期説の影響を受けて, 2 種類のコスモス状態を考え, 現在のコスモス状態は時間的にはじまったがコスモスそのもの(ἀπλῶς) は不生・永遠であるとする独特の, 中間的位置を占める解釈。資料が限られているため不明な点が残っているが著者は一応ここに収める), タウロス, (Philoponus および Pr. における) anonymi, ケルソス, プロティノス, Po., イアンブリコス, カルキディウス, マクロビウス, シュリアノス, ヒエロクレスにおよんでいる。

著者はこの論争の展開を刺激し続けた直接の動因を Ar.-ペリパトス派側からの絶えざる Pl. 説批判に求めている。またその批判の論拠は, 本書を見る限り, I) 神の不変性の要請, II) 生成したものは消滅するという一般的経験則, に集約される。I) によって, 同一不変たるべき神がなにゆえある時点で世界を創造するにいたったか, 神をして創造に赴かしめた新たな考えはなにであったかといった論難がなされ, II) からは, *Tim.* では世界の不滅性が説かれているものの, 世界がかつて現実に生成したとされる以上必ずや消滅するものでなければならないとの批判が加えられる。

I), II) の淵源はそれぞれ Ar. の *De philosophia*, *De caelo* (A, 10-12) に求められる。このような批判に対して正統派 Pl. 側は i) 方法論的解釈, ii) 存在論的形而上学的解釈, iii) 自然学的解釈の三つの主要な非時間的解釈をもって反論する。i) は, Pl. が *Tim.* で時間的叙述形式をとったのは, 教育的配慮による (*διδασκαλίας χάριν*) ないし複雑な構成体を分明にするため (*σαφηνείας χάριν*) であるとする解釈であり, ii) では, 世界が自立自存的存在でなく, より高次の原因に依拠し, それによって自己の存在をえていることを示すために, iii) では, 世界が絶えざる生成のうちに存することを示すために時間的叙述形式がとられたとされる。これら非時間的解釈のうち, i) は Sp., Xe., ii) は Cr. (しかし著者は Xe. にも ii) の解釈があったと推測する), iii) は Philo 証言にまでさかのぼりうるが, ii) を中心にしてそれらが内的な関連をもちながらいずれの解釈もほぼ一貫して存続していることが知られる。

これらは事柄それ自体としては, I) を除けば, 必ずしも特に目新しいものではないが, 本書の最大の価値は, 現存資料にくまなくあたり, 諸解釈の実態, 諸解釈間の影響または対立関係, 初出を見定め, またそのことを通じて解釈史・論争史の展開を跡付けているところにある。ここでそれらの詳細を取り上げることはできないが, 展開の基本線について言えば, 古アカデメイアでの論争の開始, ペリパトス派の優勢, Pl. 派による反論, Pl. 派内部での異説の出現とそれに対する批判, Al. によるペリパトス派側からの反駁, 新 Pl. 派による論争の終結という順を経たものであることが明らかにされていると言ってよい。すなわち, 1) Ar., Sp., Xe. の Pl. の直接の弟子たちおよび Cr. (前4世紀末) の古アカデメイア期, 2) ペリパトス派の線に沿った時間的解釈 (これにエピクロス派が加担) が優位を占めたほぼ前1世紀末までの時期, 3) エウドロス (fl. c. 25, B. C.) によって反論が開始され, アカデメイア派による Pl. 説擁護が顕著になるが, 同時に Pl. 派の間で非時間的解釈と並んで時間的解釈 (Plu., At. およびハルポクラティオン, ガレノスら) が出現したいわゆる中期 Pl. 派の時期, 4) Ar. 説を擁護すべく時間的解釈をとり, ペリパトス派側からの最後の, しかし最も鋭利かつ大規模な Pl. 説批判・Pl. 派反駁を試みた Al., 5) 非時間的解釈, 存在論的形而上学的解釈を徹底的に推進し, Po. と Pr. に解釈史上の二大頂点をもち, とりわけ Pr. によってこの問題に関する異教古代における論争の事実上の終止符が打たれることになる新 Pl. 派の時期, という五つの大きな節

からなる展開の概形が明らかにされていると言ってよいであろう。著者はこの展開を諸解釈が依拠する *Tim.* の loci の指示, 用いられた比喩, 用語の分析などをもまじえて跡付けており, 3) の時期の Plu. At., タウロスらの中期 Pl. 派によって文献学的手法が駆使され, 議論・解釈が洗練され精緻になり, それをうけて 4) の Al. が同じく文献学的手法を用いつつ最大規模の時間的解釈に立つ反駁をなし, さらにそれらの段階を経て 5) の Po. において非時間的解釈が総合整備されひとまず頂点をみる事情を現存資料の制約下で相当程度明らかに論証している。そして Ar.-ペリパトス派側の批判の論拠は結局次のような形で反駁されたことが明らかになる。すなわち, 世界は *Tim.* で説かれているように不滅であり, したがって不生であり, それゆえ神も不変である。それとともに神は存在するだけで創造するという形で神の作用のあり方が定式化され, また同時に神の永遠の存在によって, 世界の永続的な存続が保証されることになる。著者はこのような正統 Pl. 派側の非時間的, 存在論的形而上学的解釈を推進せしめた動因を Sp., Xe. 以来みられる Pl. 派の靈魂不生不滅説の維持のうちに求める。

本書には At. の神学的宗教的色彩がきわめて濃厚な時間的解釈と Al. の自然学的論理的観点からの時間的解釈との対照, タウロスの *Tim.* テキストの「改変」に関する著者の考証(著者は *Tim.*, 27C5 のテキスト改変(か→え?)をタウロスはなしていないことを論証している(S. 112ff.))など興味深い点が多々みられるが, 特に Ar. の批判の論拠としての神の不変性の要請を *De philosophia* との関連から取り上げ(vgl. fr. 16, Ross), この要請の後代における受容とそれに対する批判を一貫して重視している点は注目されてよい。とりわけうへの 2) の時期(Cr. からエウドロスまでの3世紀に近い期間)のエピクロス, エピクロス派, キケロ, またピロンのうちに *De philosophia* の影響を探り, 神の novum consilium (vgl. fr. 20, Ross) にまつわる一連のアポリアイの創始者が Ar. であり, しかも *Tim.* をも念頭に置いてのアポリアイの提起であったとし, *De philosophia* がヘレニズム, 初期皇帝期までこの問題に関して「決定的影響を与えた」(S. 34) との見解を示している。ストア派については彼らが一般に世界の現実の生成を主張したことを考慮して, 時間的解釈を取り *Tim.* を自説の保証書となしたであろうと推定しながらも, 証言がないため取り上げられていないが——ポセイドニオスの世界の現実の生起の否定(Philo, *Aet. m.*, 76

[fr. 99b, Edelstein-Kidd]) と *Tim.* 解釈との関連については Taylor (a.a.O. S. 68, Anm. 1) と異なり定かでないとする (S. 85)。またポセイドニオス、パナイティオスについては vgl. S. 30—, 2) の時期は著者の見解を考慮しながら今後様々な角度から問題にされてよいであろう (ちなみに *De philosophia* に関して著者は Effe, B., *Studien zur Kosmologie und Theologie der Aristotelischen Schrift, Über die Philosophie*, München, 1970 (Zetemata, 50) に多くを依拠している)。

なお時間的解釈と一概に言っても、そこにはむしろ Pl. 批判の立場からばかりでなく、時間的に解した Pl. 説に依拠 (ピロンがその代表) または Pl. 擁護 (At. が代表) の立場からのものも含まれているが、また世界が時間的に生成した、すなわち時間のある時点で生じたと解する者と並んで、*Tim.*, 38B6 の時間と *οὐρανός* との同時的生成の叙述を受けて、世界に先立って時間があるというわけではなく世界と時間とは同時に生成したと解する者 (ピロン, Plu. が典型) もいることに注意しなければならない。したがって時間的解釈と言うとき、それは広義には、世界がかつて現実に生成したとする解釈を意味するとしなければなるまい。

ところで、本書のテーマに接するときわれわれはおそらく二つの面から直接の関心を抱くであろう。一つは、本書にその色彩が強くみられるような、解釈史・論争史の展開に関する関心であり、他は、この問題に関する古代の解釈史が *Tim.* そのものの解釈にどのように関わりうるかという関心である。後者の関心からすれば、1) の Sp., Xe. の非時間的解釈が Ar. の批判をうけた Pl. 説の擁護のためのあくまで「解釈」にとどまるのか、それとも Pl. 自身の言葉の伝承であるのかが究極の問題になる。事実先に挙げた Taylor, Cornford, Vlastos, Tarán らも Sp., Xe. (また Cr.) の古アカデメイアの伝承の信憑性に関する見解が各々の解釈の拠り所の一つになっている。この問題に関して著者は独自の見解を取っている。すなわち、*Respublica*, 546A2, *Phaedrus*, 245D3f. を引き、Pl. 自身すですべての生成したものは消滅する、またすべての不生物は不滅であるという一般的経験則を知っており、*Tim.*, 41A8f. においてもこの問題に取り組んでおり、生成したものであってもデミウルゴスの意志によって不滅となるという例外をそこで設けているのであるが、しかし Pl. はこの例外を一方的断定的に説いたのではなく、議論に付すべきものとして述べたという見解を明らかにしている。したがって著者によれば、論争はいわば

起るべくして起こったことになる。興味深い見解であるが、しかしこの点に関する著者の立論は若干なされているにとどまり、今後様々に検討されてよい余地を残している。ともあれ、著者は論争が必然的に発生したとらえたうえで、異教古代における論争史・解釈史の展開の跡付けに全力をあげているわけである。本書は今後この方面の研究をおこなううえでの基本的な文献であり、しかも類書がないだけに、その意義は多大であり、また貴重であると言わなければならない。第2部、そしてプロティノスまでの包括的な *Tim.* 解釈史研究の刊行が待望される。

Louis Sala-Molins: *La philosophie de l'amour
chez Raymond Lulle*, Préface de Vladimir
Jankélévitch (Thèse Lille III)

Mouton, Paris, La Haye, 1974. pp. 303

野村 銑 一

Ramon Llull (C. 1235–C. 1315, ラテン名 Raymundus Lullus, 以下 L. と略記) のラテン語原典の中で最もよく揃ったものとして著名なのは、18世紀に Ivo Salzinger によって出版された *Raymundi Lulli doctoris illuminati et martyris Opera* (Moguntiae, 1721–1742, T. I–VI, IX–X. 第VII・VIII 巻は未刊) であり、最近 Minerva GMBH によって複製されたが、これには48の著作が収録されているだけで全著作の5分の1にも及ばず、また写本の比較考証もなされていないために現代の原典批判には堪え難い。ところが、今世紀も中葉になって Maioricensis Schola Lullistica から全30巻を予定して *Raimundi Lulli Opera latina* (Palmae Maioricarum, 1959–1967, T. I–V. 編集は Raimundus-Lullus-Institut der Universität Freiburg i. Br. が中心で、以後続巻の出版は Brepols に移行) が刊行されると相前後して、西欧での L. への関心は一段と高まり、L. 研究は長足の進歩を遂げ始めた。このことは、1957年 Maioricensis Schola Lullistica から L. 研究を中心とした雑誌